

## 19 . マカヒヤの伝説 ( タガログ )

マン・ドンドイとアリン・イスカは、自分たちが祝福されていることを考えていました。お金についての心配をすることないほど、富があることだけではありません。彼らには、マリアという名前の幼く美しい娘がいて、彼らは、彼女のことを世のどんな富よりも、愛していました。

マリアは親切で思いやりのある子どもで、両親を大変愛し、常に彼らに従順でした。もし、マリアにひとつ良くない特徴があるとしたら、彼女ははにかみ屋で、それは、どちらかと言うと彼女を溺愛している母と父の過保護によるものでした。

いつでも、お客が家に来ると、それがたとえ家族の友人であっても、恥ずかしがり屋のマリアは、彼らが出てゆくまで、しばしば庭に隠れているのです。事実、マリアは、長い時間を庭で過ごすので、あたかもそこは、彼女の第二の家のようにでした。彼女は何時間も植物や花に水をやったり、世話をし、世話をし、彼女は、それらを最高の友人と思うようになったのです。

ところが、ある日、災害がマリアの村を襲いました。近くの山から、獲物を求めて徘徊する盗賊が、警告なしに襲ってきたのです。血に飢えた盗賊は、村の人々を叩き殺して、彼らの持っていたもの、特に金や宝石を略奪しました。

マン・ドンドイとアリン・イスカは、彼らの家に盗賊が近づくのを見たので、すぐにドアと窓を閉めました。マリアの命を奪われることを恐れて、彼女には、庭に行って隠れるように、盗賊が出て行くまで、動いたり、声を出したりしないように、言いました。

マリアは両親に従い、庭に行って隠れました。彼女がそうするとすぐに、盗賊たちは家の戸を壊し、無力な母と父を襲いました。彼らは情け容赦なく、その夫婦を叩き、彼らが持っている金と宝石のありかを教えるように命じました。

盗賊はまた、マリアのことも知っていて、両親を叩き、彼らの娘をどこに隠したのか、教える、と言いました。ひどく傷つけられながらも、マフィリピンの神話と伝説 19 . マカヒヤの伝説

ン・ドンドイとアリン・イスカは、貴金属のことは言っても、彼らの大切な娘がどこにいるか、漏らすことは拒否しました。

血に飢えた盗賊たちは、その夫婦のすべての金と宝石を略奪すると、庭へ娘マリアを探しに行きました。

しかし、たとえどんなに彼らが探しても、盗賊たちはマリアを見つけることはできませんでした。彼女は両親の教えに従い、動くことも、声を出すこともしませんでした。

ついに盗賊は、マリアの家を出て、彼女の両親の金と宝石を運ぶことで、満足しました。

盗賊が出て行くなり、傷ついているにもかかわらず、マン・ドンドイとアリン・イスカは、庭に急ぎ、娘が無事か、見に行きました。

しかし、彼らがどこを探しても、どこにもマリアは見つけれませんでした。マン・ドンドイとアリン・イスカは、失意で、憶測し、美しい娘は盗賊に誘拐され、殺されるかもしれないと思いました。アリン・イスカは正気を失って泣き始め、夫は彼女を慰めました。

しかし、マン・ドンドイは、自分が体を動かした時、何かが彼の手首をチクリと刺すのを感じました。彼はかがんで、彼の足元に小さな植物を見ました。それは、以前、庭で見たことのない植物でした。しかし、彼がそのめずらしい植物に近づいて触ろうとすると、すぐに、それは葉を曲げて、引っ込めてしまいました。

アリン・イスカも、葉を引っ込める植物に興味を持って、確かめようとかがみましました。かがむ時、彼女の涙が数滴、その小さな植物に落ちました。彼女と夫がびっくりしたことには、涙が植物につくと、それは、丸く美しいラベンダー色の花になりました。そこで、彼らにはすぐにわかりました。このびっくりした植物は、彼らの愛する娘マリアであったのです。

その日から、マン・ドンドイとその妻は、その庭の新しい植物に、特に手をかけて世話するようになりました。彼らはすべての富を盗賊に奪われましたが、少なくとも彼らは、娘を持っています。

世のすべての金よりも特別なものです。

しかし、今日でも、恥ずかしがりの、美しいラベンダー色の花の植物は、採ろうとすると、葉を丸くします。

\* 訳者注

「マカヒヤ」というのは、日本語では「オジギソウ」と呼んでいる植物です。フィリピン中で見られる植物で、その起源を説明する伝説なんでしょうね。